

## 文系は本当に不要なのか

### —「文」の字義からの再確認—

Is cultural science really unnecessary for learning?

—Recognized anew from the original meaning of the Chinese character- “Bun”—

松村 茂樹<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科

Shigeki Matsumura<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Department of Communication and Culture Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：文系不要論，原点に立ち戻る，役に立つ

Key words : A view of unnecessary for cultural science, Return to the starting point, Be useful

#### 抄録

「文系不要論」が論議されている。どうしてこういった状況に至ったのであろうか。また、この状況を打開するには、どうしたらいいのであろうか。一度、「文」の字義という原点に立ち戻って考えてみたい。「文系」は役に立たないと言われるが、ビジネスの現場でも、就職でも大いに役に立つ。というより、「文系」の学問なきところ、ビジネスも就職も成功しないのである。こういった「文系」のすばらしさをもっと積極的に喧伝すれば、「文系不要論」を克服できるのではないか。

#### 1. 「文系不要論」とその波紋

2014年8月4日、文部科学省に設置されている国立大学法人評価委員会は、「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しに関する視点」<sup>[1]</sup>を提出し、この中に見える、

「ミッションの再定義」を踏まえた速やかな組織改革が必要ではないか。特に教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むべきではないか(2.組織の見直しに関する視点)という一項目が、「文系不要論」と捉えられ、議論を呼んだ。

たとえば、名古屋大学准教授(日本近代文学・文化、移民文学)・日比嘉隆氏は、2014年8月27日付『BLOGOS』「国立大から教員養成系・人文社会科学系は追い出されるかもしれない」<sup>[2]</sup>の中で、

教育系・人文社会系のスタッフ一同が、背中に寒風を感じるだろう箇所を引用します。

と記し、上引の項を引用している。そして、日本の大学に「社会的要請の高い分野」だけが繁茂することを怖れるとし、

大学に「役に立つ」ことだけを求める社会は、その他の組織や個人にも「役に立つ」ことだけを求めることでしょう。それは、恐ろしくて、息苦しくて、貧しい社会です。

と結んでいる。

2014年9月2日付『東京新聞』朝刊「国立大から文系消える？文科省改革案を通告」は、沢田千秋氏の署名記事で、同評価委員会および今回の通告について紹介した後、

現場からはすでに通告に対する反発の声が上がっている。

として、愛知教育大学講師(哲学)・今村健一郎氏の、

確かに哲学は実用的じゃないし、就職できないし、僕なんか食うのも必死な貧乏。でも学生には教員になる勉強だけでなく、教養も身に付けてほしい。この問題は国立大学改革に限らず、日本の教育とは何かという本質的な問題を突き

つけている。

や、文化学園大学助教<sup>[3]</sup>（政治学）・白井聡氏の、現場の教員は中期目標や改革プランのため、くだらない書類を山ほど書かされ、本来的な研究や教育の時間をそがれ、サラリーマン化している。このままでは、人文社会科学系は改廃されていく。

といった声を紹介している。

また、2015年3月4日付『朝日新聞』朝刊「争論 文系学部で何を教える」では、経営コンサルタント・富山和彦氏と、前出の名古屋大学准教授・日比嘉隆氏が、それぞれの意見を述べている（聞き手：萩一晶氏）。

富山氏は、「【実践力】実社会に通じる教育こそ重要」という見出しで、

学生には、職業人として必要なスキル、実践力を大学で身につけてほしい。学術的な教養にこだわる従来の文系学部のほとんどは、ローカル大学にはもはや不要です。何の役にも立ちません。（中略）大学の先生は、もっと現実社会をよく見るべきです。技能を軸にして日々の糧を得ていく大多数の学生の人生にとって、何が本当に必要な「教養」なのか。虚心に見つめ直すべきときです。

と述べ、大学教員の意識転換を求めている。

また、日比氏は、「【考える力】蓄えた底力で危機乗り越える」という見出しで、自分の頭で考える力が求められているとし、

大学の文系学部で鍛えるのが、この力です。たくさん本を読み、膨大な学説と向き合い、いろんな可能性を検証してつぶしていく。時間がかかって面倒臭いプロセスを背負い込む。そうやって身につけた教養は、どんな分野に進んでも役に立つ力になるはずです。（中略）大学はいまのままでいい、と言っているわけではありません。振り返って考えるべきことは多々あります。自らの研究と教育にどういう価値があるのか。信じることを具体的に語り、社会に返していくことが求められていると感じます。ただ、それは市場主義にのみ込まれる形ではいけない。と述べ、富山氏とは違った立場から、大学教員の意識転換を求めている。

この他にも、筆者の既知・未知に関わらず、「文系不要論」に関する意見は多々あろう。また、以前から、「文学部不要論」など、これに類する論議

は存在しており、今に始まったわけでもない。

筆者は、この論議に身を投じたいわけではないが、以前から「文系」とか「文学部」の「文」について考えるところがあり、この論議が高まったのを機に、それを提起してみたい。このことにより、文系に身を置く者としての自覚を再確認できるようにも思う。

## 2. 「文」の字義からの確認

まず、「文」の字義をみておきたい<sup>[4]</sup>。「文」の篆書体を見ると、人の正面形に「聖化の入れ墨」を表す「×」が入っており、この「文身」が原義である。古代中国において、「文身」は呪的記号あるいは身分標識として用いられたことから「マーク」という派生義ができ、この意で用いられている「斑」や「紋」には「文」が構成要素として入っている。「マーク」はエンブレムとして「装飾」となり、この義が派生して「文彩」などの語が用いられるようになる。「装飾」が加えられると「すばらしい」状態になるとしてこの義が派生し、「彦」（立派な成年男子）などこの意で用いられる字には、「文」が入っている（「彦」の上部は旧字体では「文」に作る）。そして、「すばらしい」状態に化していくことを「文化」といい、人間の「文化」を学ぶのが「文学」であり、「文系」の学問なのである。

つまり、「文学」や「文系」は人がすばらしくなるための学問であり、人が前向きに進歩することを希求している以上、当然存在しているものであって、要不要を論じる対象ではないのではないか。

## 3. 人がすばらしくなるための学問

それなのに、なぜ不要論が出てくるのであろうか？ それは、多くの人が「人がすばらしくなるための学問」であることを実感しなくなったからではなからうか。その原因は、「文系」の学術化と専門化にあると思われる。

学術化とは、大学教員などの研究者が学問を職業とし、学問のプロになって行くことである。プロには当然専門性が具わり、細分化された領域や分野が形成される。「文系」の学問をするためにも、まず、こういった領域なり分野なりに入って行かねばならない。

そういった領域や分野に入って行った人を待ち受けているのは、学問を職業とするための技術の修得であり、その技術をマスターしている大学教

員が、その指導にあたっているのである。

これは必然的なことなのかもしれない。ただ、いわゆる大学の大衆化により、「文系」の技術取得の必要性を感じなくなった人が多くなったのであろう。また、技術指導に邁進するうち、「文系」が「人がすばらしくなるための学問」であることを自明のこととして言わなくなってしまい、指導を受ける側に伝わらなくなってしまったようにも思われる。かくして、不要論が出るに至ったのではないか。

#### 4. 原点に立ち戻る

こういった危機的状況の際には、一度原点に立ち戻るのがいいのではないか。つまり、「文系」が「人がすばらしくなるための学問」であることを再確認し、それを世に発信すると共に、授業の最終目的に位置付けるようにするのである。

そもそも、「人」が「すばらしくなる」とは、極めて単純化して言うなら、自分で考え、自分で行動できるようになることだ。授業を受ける側の人、つまり学生にこれを促し、学生もこの能力がついたことを実感できれば、「文系」の必要性を認識するのではないか。

これは、いわゆる学生主体の授業の実施ということになる。「文系」は「人がすばらしくなるための学問」すべてを指すので、この原点にも立ち戻り、とりあえず細分化された専門を取り払い、学生には、最初は広い視野で幅広くさまざまな学問に触れてもらい、自らの興味に従って、自らの専門を決めてもらえばいい。その際、既存の専門分野を選んでもいいし、学際的領域に挑んでもいい。このことが、学問の新陳代謝を促し、その健全性保持にもつながろう。

好きこそものの上手なれで、人は興味のあることなら一生懸命に行うものである。そんな自らが選んだ専門により、自分で考え、自分で行動できるようになるという最終目的に向かって学ぶ「文系」を不要という人は少ないのではないか。

#### 5. 文系は役に立つ

さらに言うなら、こういった「文系」は、ビジネスやひいては就職にも「役に立つ」のではないか。というより、「文系」の学問なきところ、ビジネスや就職はできないはずである。

「文系」の学問は、「人」が「すばらしくなる」ための方法として、本質探究を行ってきた。自分の興味の対象の本質をまず探り、その本質に基づいて考えたり、行動したりすれば道を誤ることがないというものである。

たとえば、ビジネスの世界で、新たな提案を求められた場合、思いつきでめったやたらに提案したところで、他者の同意が得られず、実現しないことも多いかもしれないが、本質をつかんだ提案なら他者の同意が得られやすく、実現し、成功する可能性が高いだろう。

また、就職にしても、就職希望先およびそで行われていることの本質を把握し、それに自分がどのように貢献できるかを述べることで、はじめて就職希望先からのオファーを得られるのではないか。

ビジネスや就職でうまく行っている人は、意識しているかどうかはともかく、こういった「文系」の学問の方法を修得し、実践しているのである。

今後は、こういった「文系」のすばらしさをもっと積極的に喧伝すればいいのではないか。こういった努力が「文系不要論」の克服につながると筆者は考えている。

#### 註

[1]『文部科学省』「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しに関する視点」について(案) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/kokuritu/gijiroku/\\_icsFiles/afieldfile/2014/08/13/1350876\\_02.pdf#search=国立大学法人の組織および](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/kokuritu/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2014/08/13/1350876_02.pdf#search=国立大学法人の組織および) 2015/03/04 (プリントアウトの日付、以下同)

[2]『BLOGOS』日比嘉隆「国立大から教員養成系・人文社会科学系は追い出されるかもしれない」2014.08.27UP <http://blogos.com/article/93233/> 2015/05/03

[3]当時。2015年4月から京都精華大学専任講師

[4]白川静『字統』1984 平凡社 等を参照

#### 付記

本報告は、平成26年度大妻女子大学人間生活文化研究所共同研究プロジェクト「アジア・太平洋地域における言語文化の総合的研究」(課題番号:K2617, 研究代表者:松村茂樹)による成果の一部である。

---

**Abstract**

---

“A view of unnecessary for cultural science” is a hot topic of debate. Why did this problem come up? How to try to make a breakthrough in this situation? I would like to suggest that the original meaning of the Chinese character- “bun”. They say that cultural science is useless. But I think cultural science is very useful. Without cultural sciences, we can't succeed in business and employment. If we are more widely publicizing the wonderfully of cultural science, we will be able to overcome that view of unnecessary.

---

(受付日：2015年5月8日，受理日：2015年5月19日)



松村 茂樹 (まつむら しげき)

現職：大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授

筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科中退 博士（文学，筑波大学）

専門は中国文化論，日中交流論。現在は，ボストン大学客員研究員として，米国ボストンに国外研修中。ボストン美術館東洋部長を務めた岡倉天心が，上海滞在中の長尾雨山の仲介で呉昌碩に揮毫を依頼した「与古為徒」扁額を手がかりに，当時の日中米文化交流研究を進めている。

主な著書：

書を考える一書の本質とは（単著，二玄社）

呉昌碩研究（単著，研文出版）

呉昌碩談論—文人と芸術家の間—（単編，柳原出版）

書を探る—王羲之から書教育まで（単著，アートダイジェスト）

近代中国の文化人と書（単著，研文出版）

鄭板橋（共著，芸術新聞社）

傅山（共著，芸術新聞社）

遺老が語る故宮博物院（共訳，二玄社）